平成11年6月4日
発行　新潟国際情報大学

国際・情報

INTERNATIONAL & INFORMATION

新潟国際情報大学広報　第7号

〒950-2292 新潟市みずき野3丁目1番1号 tel 025-239-3111 fax 025-239-3690 E-mail somu@nuis.ac.jp URL http://www.nuis.ac.jp

「学生部の活動」

学生部長　高木　義和

学生部の活動には大きく分けて学生の課外活動に対する支援と、学生の生活指導という両面があります。この基本的な枠組みは従来と同じですが、最近の学生の意識や学生をとりまく環境の変化に伴い学生部の活動も変化しています。ここでは学生部をとりまく最近の事情についてすこし触れてみることにします。

学生の課外活動支援には、自治会活動、部・同好会の活動、大学祭、スポーツ大会に対する支援があります。部・同好会活動は課外活動の柱をなすものですが、その組織率は大学によって差があるものの減少傾向はどこも同じで、部で20％程度、同好会を含めて50％程度というのが現状といえます。本学の組織率は同好会を含め35％程度ですが、同好会はわずか4％弱です。今後は活動の内容、継続性、支援の効果等を考慮すると、同好会活動の活性化も重要ですが、活性度の高い部に支援の重点を置かざるを得ないと考えられます。

次に課外活動支援とは少し異なりますが、最近要求が多くなっているものに学生相談やカウンセリングがあります。カウンセリングが必要な学生は他大学の例を平均すると全学生の7～8％程度のようです。その内容は友達ができないといったものから専門医の指導が必要なものまで幅の広いものです。プライバシー保護の観点から面接内容は本人とカウンセラー以外に漏れないように配慮するのは当然ですが、相談を受ける学生にとっては申し込みの事実も知られたくないのでメールを利用して申し込みを受付けるなどの配慮も必要です。県内ほとんどの大学で専門家によるカウンセリングが毎週定期的に行われていることから、本学でも現状の月2回から定期的な形態に移行する必要があると考えています。比較的最近登場した学生部が関係する活動として、ボランティア活動、インターンシップ制度、サービスラーニングがあります。本学でも日本海重油流出事故でボランティア活動を、情報システム学科の学外実習でインターンシップ制度を経験しています。学生部では事故の際の保険に関する対応を行っていますが、これらの制度をより実効のあるものにするためには学生が満足感、達成感など感動を感じられる実施プログラムの開発が必要となります。

学生部の本来の目的はあくまでも学生支援で生活指導は付随的な事項だと考えたいのですが、次々に多様な問題が生じるため生活指導が結果として大きなウエートを占めることになります。昨年度は喫煙規制を重点課題として取り組み、学友会と共同で学生ホールの利用について検討しました。椅子とテーブルを高さの高いものへ交換し、ラーメンなどの食事場所を新たに指定したことにより、4月の実施以降は環境がかなり改善されています。この他にも車両通学環境の整備、交通事故防止対策や、マナーの欠如、低年齢化現象に伴うと考えられる問題があります。これらの問題解決のためにはまず合理的なルールを作り、学生と教職員が同じ土俵のうえで話すことができる環境を整備することが重要だと考えています。以上いくつかの話題を紹介しましたが、いずれにしても学生部では学生生活全般をバックアップできるような活動を行っています。

新入生に期待する

学習指導委員長
内山　鉄二朗

入学式で新入生の皆さんの緊張した面持、ぎこちない動作を見ていると、人生の一つの節目を迎えていることを、皆さんがいかに実感しているかが伝わって来ます。皆さんがこの「実感」を「自覚」にまで高めて充実した学生生活を送ってくれることを期待します。

大学では皆さんを主体的、自主的に学習計画を立て、実行することができる「大人」として扱っています。初めてのことであり、戸惑いもあるかと思いますが、この新しい選択肢の多様な学習方法の楽しさを知ってください。とは言え、ガイダンスだけではよくわからない点があるかと思います。その時は臆することなく教務課の職員、ゼミやクラスの先生に質問し、相談してください。これも「大人」のすることです。

大学はミニ社会です。そこには多数の人々が一緒に生活する社会に必要な、共通のルールがあります。小・中・高校にもルールがあったと思いますが、大学では学生が主体的、自主的にルールを守ることができると期待し、強制することをできるだけ避けます。したがって、ルールを守らない学生には自己責任を取ってもらい、不利益になっても当然であるという自覚を持ってもらいます。これもまた「大人」のすることです。

「大人」であるということは、選択肢を一杯持っているということです。同時に、それに伴う責任も背負っているということです。そのことを十分自覚して、皆さんが本学で終生の思い出になるような実り豊かな学生生活を送ってくれることを期待します。

平成11年度入学式挙行
―315名が入学

4月7日㈬午後1時から本学140教室において第6回入学式が挙行された。

新入生315名（情報文化学科121名、情報システム学科194名）、父母、来賓および教職員多数出席のもと小沢辰男学長・理事長式辞、在校生代表堀博英君（学支会会長）の歓迎の言葉に続いて、新入生代表情報文化学科野崎美由紀さんが「私の抱負」を述べた。

4月8日㈭にはガイダンスが行われ、その後全員が1泊2日のフレッシュマンキャンプ（於厚生年金スポーツセンター）に参加し、大学生活のスタートを切った。

私の抱負

新入生代表　情報文化学科　野崎　美由紀

本日は私達新入生の為にこのような素晴しい式を開いていただき、また心のこもった式辞をいただき、ありがとうございます。

何か新しいことが待っているようなこんな季節に私達はこの新潟国際情報大学に入学できたことを心よりうれしく思っています。

私が最初にこの学校に訪れたのは、昨年の十月、学校説明会の日でした。小さな赤塚駅に降り立つと、雄大な角田山、弥彦山が見え、目の前には一面に広がる田んぼ、その中にぽつんと建っている建物がこの新潟国際情報大学でした。小白鳥橋、さらに、大白鳥橋を越え、大学にたどり着いた時、あらためてよく周りを眺めると、本当に見渡す限りの大自然に感動したのを覚えています。

さて、私たちは今日から本学での新たな生活がスタートするわけですが、四年間を有意義に過ごせるかどうかは私たち次第です。私は何を学びたいのか目的を持って、その目的に向かって一生懸命努力することが大切だと思います。そして、学校生活の中でいろいろなことにチャレンジし、多くの経験を積んで人間形成に務めたいと思います。

21世紀は、国や地域を越えた新しい時代です。地球規模で物事が見られ、様々な国の人々と交流を深められる一国際人になれるよう努力していきたいと思います。

最後に、本学の理念を真摯（しんし）に受け止め、自己の可能性を広げる努力を続けることをここに誓い入学の御挨拶とさせていただきます。

来年度入試制度を大幅改革

入試実施委員長　原口　武彦

本学の平成十二年度入試は、大学入試センター試験の導入と、文部省の推薦入試定員枠の拡大方針を受けて、大幅に改定されることになった。

まず推薦入試については、県内外から指定校の数を若干ふやし、定員を30名（十一年度までは、25名）とする。公募制の定員枠も65名（従来は40名）に拡大し、各高校1名であった推薦人数を、文化、システム両学科各1名の2名に拡大する。また学力の推薦基準も、①全教科の評定平均値4・0以上で、②主要6教科のうちいずれか一つが4・2以上となっていたものを、①と②の基準のいずれかを満たすものとし、条件を若干緩和する。これは、高校の入試担当の諸先生からよせられた要望に答えた措置である。

入試センター試験の導入（定員20名）に伴い、「小論文・面接」方式は後期試験に吸収し、情報文化学科だけで存続させる。

受験生の絶対数の減少という状況のもとで、入試における競争的要素はとみに減少しつつある。これからの入試は、大学側も受験生側も、それぞれの特徴、個性にふさわしい場、人物を選び出す機会となるであろう。

本学としては、できるかぎり多様な選抜方式を設けて、より多様な資質をもつ学生を集め、より活力のある学舎を築き上げたいと願っている。新たにスポーツ推薦（若干名）を設けたのも、その一環である。

厳粛に、華やかに 卒業式挙行

3月19日㈮午後1時より、平成10年度卒業式が、新潟市民プラザで行なわれた。今年は式場を市の中心部に移し、交通の便のよいこともあり、多数の父兄が列席した。

第2回卒業生として、情報文化学科123名、情報システム学科165名、合計288名が卒業し社会に巣立った。

式典は、学位記授与で始まり、卒業生全員の氏名が呼び上げられ、各学科総代が小沢辰男学長から学位記を受け取った。学長は、はなむけに「去る日の多きを苦しまず、ただ失う日の少なき事を求めよ」という言葉を贈って卒業を祝った。長谷川義明新潟市長の祝辞が代読され、学生表彰に続いて、情報システム学科小林一輝君が卒業生代表として答辞を述べて式典を終えた。

午後6時からは、ホテルイタリア軒において、学生主催の卒業記念パーティーが開かれ、和やかな雰囲気の中で社会への門出を祝した。

卒業式で学生表彰

3月19日の卒業式に合わせて、4年間に顕著な活動をした学生の表彰が行われた。

●理事長賞　軟式野球部員7名
米沢正浩、安沢雄輔、海老名肇、田村清史、湊元真介、中川勉、中野守（2年連続全国大会出場、ベスト8）

●学長賞（総代）
情報文化学科　佐藤美樹
情報システム学科　井上舞
（学業成績優秀）

●課外活動賞
情報システム学科　小塚洋輔
（サッカー部のチーム作り推進）
情報文化学科　黒崎資多右
（学友会活動の活性化）
情報文化学科　桜井万致子
（学友会新聞による情報発信）

●国際交流賞
情報文化学科　川上洋子
（韓国との国際交流、スピーチコンテスト入賞）

●地域交流賞
情報文化学科　親松直洋
（紅翔祭実行委員長として地域との交流推進）

●情報システム賞
情報システム学科　武田寛之
（独創的なソフトウェア開発）

情報センターの新コンピュータ実習環境 WindowsNT

開学6年目を迎え、2階3実習室のパソコンをMacintoshから、WindowsNT環境に変更した。パソコンの機種が変わり戸惑う利用者もいるかと思うが、以下に説明する新しい環境にした方針および新たに提供するサービスを理解して、この環境を正しく、十分に活用していただきたい。情報センタでは新しい環境の決定に、以下のことを重視した。

世界的な標準環境を提供する

利用者個人の環境、および社会に出てから使用する環境と同等の環境で学習、利用できるようIBM PC／AT互換機とWindows系OS（WindowsNT）の組合せを採用した。

ワープロ、計算表、プレゼンテーションに使用するソフトウエアも、一般的に使用されているMicrosoft Office（Word,Excel,PowerPoint…）を採用している。

セキュリティを確保する

許可された利用者だけが実習室パソコンを利用できるように、UNIXのユーザID／パスワードを使用して認証を行うようにした。これによって従来の環境に比べて悪戯などに対する利用者への悪影響をなくすることができる。

新たに提供するサービス

UNIXのホームディレクトリを、学生がログインしたWindowsNT上で提供している。これによって、WindowsNT上で作成したファイルをフロッピに保存して持ち歩く必要がなくなる。

市民への図書『貸出』がスタート

開学6年目を迎え、情報閲覧室（図書館）の蔵書や情報検索環境は一段と整備されてきました。地域に開かれた大学をめざし、情報閲覧室はすでに広く市民の方々に開放され資料の「閲覧」は自由でしたが、この4月から、普通の図書館と同様、図書の「貸出」ができるようになりました。

県内に在住する満18才以上の方で、調査・研究の目的であれば、誰もが利用できます。手続きとしては、最初に「利用登録申込書」の記入と、身元を確認するもの（運転免許証等）の提示をお願いすることになります。その際、「利用カード」をお渡ししますので、費用として500円いただきます。1回の貸出冊数と期間は、2冊まで2週間です。ただし本学の試験期間（7月1日～7月31日及び1月8日～1月31日）は利用できません。

本学の情報閲覧室の特徴として、まずコンピューター関係の本や、中国、コリア、東南アジア、アメリカ各国に関係した図書の充実があげられます。また、インターネット上のさまざまなデータベースやCD-ROMを使い、最新の書誌情報、雑誌論文、新聞記事の検索ができます。県立図書館や新潟大学にある本を探すのも、簡単にできます。インターネットなんて触ったこともないという方には、担当の司書がやさしく教えてくれますから、心配いりません。図書館（情報閲覧室）では、多くの方々から気持ちよく利用してもらえる図書館づくりをめざしています。ぜひ一度、気軽に情報閲覧室の扉をたたいてみてください。

情報閲覧室に新雑誌『cut』も登場!!

4月の新学期から情報閲覧室に、新しい雑誌が一挙に増えました。

「rockin' on」、「cut」、「DOS-V magazine」、「UNIX USER」、「NAVI」、「日経Trendy」、「Tarzan」、「流行通信」、「Linux Japan」、「天文ガイド」、「ナショナル・ジオグラフィック」、「スマッシュ」、「太陽」、「スキージャーナル」、「生活と環境」、「暮しの手帖」、「栄養と料理」など、47タイトルの雑誌を新規購入しました。

いずれも、各分野の最新の情報を満載のものから、歴史のある総合誌まで、多彩なラインナップです。これらの雑誌は、学生用資料の拡充のため、本学の父母会よりの寄付によって購入したものです。

授業の合間に気軽に楽しく読めるだけでなく、卒業研究や課題の参考資料としても、また速報性においても重要な情報源となります。インターネットなどの情報検索ツールと連動させて、雑誌記事のより一層の活用も可能です。

さらに、海外旅行の強力な助っ人『地球の歩き方』シリーズも登場しました。異文化理解に必携の各国各地のガイドブック・シリーズをはじめ、『旅の会話集』や『成功する留学』シリーズなども揃っています。

ぜひ、情報閲覧室に足を運んで、これらの資料を有効に活用してください。

新任教員紹介

情報システム学科 教授 後藤 公彦

担当科目：経営と組織、情報システム演習、基礎演習等
専門分野：経済学、金融財政論、デリバティブ理論、環境情報システム論
経歴：1963年東京大学工学部卒、1971年ハーバード大学経営大学院卒
経営学修士（M・B・A.）、1999年博士（学術学、Ph・D）、米国ローブ・ローズ投資銀行極東引受担当副社長、米国リパブリック銀行上席副社長兼在日代表、国立がんセンター研究所客員研究員（医療経済・健康経済）、東京工業大学・慶応大学・中央大学・法政大学非常勤講師（経済学・金融財政論・経済性工学・情報システム論）

ウォール街の投資銀行に勤め、ニューヨーク・香港・ロンドン等を拠点として、国際資金調達・運用・企業の合併・吸収・投資決定に携わってきました。経営学・為替・株式・債券理論価値と予測・需要予測・環境経済を、豊富な事例を用いて説明し、学生の興味が生まれてくるわかりやすい講義をします。安心してついてきて下さい。

情報システム学科 教授 市川 照久

担当科目：情報検索、情報産業、情報システム特論、基礎演習、情報システム演習
専門分野：情報システム学の研究、産業技術向上策と知的生産性評価法の研究
経歴：1965年 慶応義塾大学工学部管理工学科卒業
1965年～1998年 三菱電機株式会社（SE部門、研究部門）
1998年～1999年 株式会社三菱電機ビジネスシステムへ出向

教えて育てる「教育」から、自ら学び習得する「学習」への変革が、私の人材育成コンセプトです。情報技術を活用して国際社会に活躍できる人材になることを目指して一緒に学びましょう。

情報システム学科 教授 杉野 隆

担当科目：システム論、科学と技術、情報システム演習

30年前に大学を出、新日本製鉄に入社し、大体は情報システム部門に所属していました。情報システムの設計開発、社内ネットワークシステムの企画、構築、運用、通信サービス事業といった仕事に従事しました。専門は情報ネットワーク論となるでしょうが、アカデミックな意味での専門にはあまりこだわっていません。企業での経験をもとに、ネットワークの設計論、情報ネットワークの社会経済へのインパクトについて多面的に勉強しようと考えています。

この30年間に社会も大学も大変なパラダイムシフトを経験しました。しかし、必要とする基礎知識はあまり変わっていません。その意味で、学生時代には幅広く貪欲に「知」の探究に努めていただきたい。

情報システム学科 助教授 山口 直人

担当科目：データ解析、生産企画と管理、情報システム演習
専門分野：社会工学、特に行政と情報システムの関わりについて
経歴：慶大管理工学科卒、東工大大学院社会工学専攻終了
宇都宮市役所に勤務。

長年、行政（地方自治体）に身を置いて、地域全体に関する総合計画の策定に携わって来た中で、計画づくりを支援する情報システムを考えて来ましたが、目指すところはどうやって客観的・科学的に計画を作るかということでした。また、行政や地域の情報化も進める仕事も担って来ましたが、具体的には、LANの設計施工・運用管理やホームページの作成でした。

世の中は、行政でもそういう新しいシステムによって仕事をするようになりつつありますので、まず、そういうシステムに馴染めるようになること、そして、そのシステムによって、もっと良い仕事ができるようになること、それを学生の皆さんと一緒になって実践していきましょう。

情報システム学科 講師 河原 和好

担当科目：コンピュータシステム、情報技術特論C、情報処理・演習2、情報システム演習
専門分野：主に画像処理に関する研究をしています。大学院では、ファジィ理論を画像処理に応用する研究を行なってきました。バーチャルシステム・ラボラトリーでは、乳がんX線写真を解析する研究を行なってきました。
経歴：1993年 信州大学工学部情報工学科卒業
1995年 信州大学工学系研究科博士前期課程情報工学専攻終了
1998年 信州大学院工学系研究博士後期課程システム開発工学専攻終了
1998年4月～1999年3月 岐阜大学バーチャルシステム・ラボラトリー非常勤研究員

コンピュータの仕組みとプログラミング言語を教えています。学生の皆さんには、いろいろなことにチャレンジして自分の興味のあることをみつけ、それを深く追究するようになって欲しいと思います。

情報システム学科 講師 塚田 真一

担当科目：数学1、数学2、数値実験法、情報処理演習2

私は一昨年に大学院を終了し、昨年度は文部省・統計数理研究所で非常勤研究員、明星大学と東京医科歯科大学大学院で非常勤講師の三役をこなしていました。今年度、本学では数学1・数学2・数値実験法を担当しています。担当科目は数学関係の科目ですが、専門分野は統計学です。特に多変量解析を専門に研究しています。統計というと国勢調査のようなものをイメージする人もいると思いますが、世の中の様々な現象を客観的に考察するため、結構目に見えないところで使われています。しかし誤用も多くされていますので、学生には「統計学の基本的な考え方」をしっかり身につけてもらいたいと思っています。

教員の昇格人事（平成11年4月1日）

教授	小澤治子	情報文化学科
助教授	越智敏夫	情報文化学科
助教授	澤口晋一	情報文化学科

“資格取得への挑戦”

情報処理技術者試験

平成10年秋期（10月）に実施された情報処理技術者試験の受験結果は下記のとおりです。

ただし、この結果は学校からの申し込み分であって、個人での受験結果は含まれていません。

第二種情報処理技術者　19名受験　6名合格
初級システムアドミニストレータ　6名受験　2名合格

合格率は、全国の平均を上回っています。

中国語検定試験

今年3月第37回中国語検定試験に参加した学生の中で、合格者は3級1名、4級7名、準4級1名でした。今回は本校ではとくに4級の合格者が多く、4級の全国の合格率は31.5%に対し、本校の合格率は63%に達しました。この成績は学生個人の努力にもよるが、中国語研究会の積極的な活動も語学レベルの向上に貢献しています。中国語研究会は春休みに毎週2回の勉強活動を行い、とても良い効果が得られています。

TOEIC英語コミュニケーションテスト

本学では、毎年実施しているTOEIC（*1）の特別受験（*2）を、98年度は、12月5日㈯におこないました。

69名が受験し、平均点は366点で、97年度よりも6点向上しました。

	98年度	97年度	
受験者数	69名	63名	+6名
平均点	366.4点	360.7点	+5.7点

*1:TOEICとは、Test of English for International Commnuicationの略で、英語によるコミュニケーション能力の国際的なテストです。
*2:TOEICの特別受験制度とは、一般テストは受験料が6615円に対して、本学での特別受験料は4050円と39%も割安で受験できるものです。

市民のための公開講座「映画のなかの市民社会」

公開講座「映画のなかの市民社会」が5月8日から始まった。シネ・ウインドという一般の映画館で本学指定の映画を8週間にわたって上映し、それを公開講座と組み合わせるという今回の試みは、こうした公開講座としては新しいスタイルである。受講者には前もって各作品を鑑賞しておいてもらって、それを前提として講演を行う。

上映作品は「十二人の怒れる男」「戦艦ポチョムキン」「クライング・ゲーム」「少年」である。すべて歴史に残る傑作であるが、各作品の主題や舞台はそれぞれ異なっている。しかし、これらの作品に共通しているのは、人間が市民として行動するのはどのようなことなのかという問いを発しているということである。

現在の日本、現在の新潟は、本当に市民によって作られた社会として機能しているのだろうか。日々の暮らしを私たちは本当に市民社会と呼べるのだろうか。以上のようなことを受講者だけでなく講師や関係者も含めた全員で考え続けていけるような講座にしたい。

講師は、内山鉄二朗教授、市岡政夫教授、石川眞澄教授、高瀬昭治教授である。

市民のための公開講座「健康体力づくりのためのフィットネス・トレーニング」

現在、日本は最長寿国だが国民医療費が年間約28兆円かかっている。21世紀には高齢社会における老人医療や介護、青少年における成人病の発症や基礎体力の低下などの問題がさらに顕在化してくるであろう。本学の体育の授業では従来の「体育実技」とは異なり、健康体力づくりのための理論と方法を学ぶ「フィットネス教育」を行っている。つまり、学生が近い将来に直面する健康体力に関する諸問題に対応できるような能力の養成を目指した「体育」である。

今回の公開講座は体育で行っている内容の一部を紹介するもので、5月8日、6月12日、7月10日、の3回にわたって開かれる。1回目は「自分の身体を知る」というテーマで、講義では主に肥満度や体力の評価及び健康との関連について触れ、実習では体脂肪率やBMIなどの形態測定や体力診断テストを実施する。2回目は「自分の身体を自己管理する」というテーマで、講義ではフィットネス理論や運動と健康との関連について触れ、実習では有酸素的運動やウエイトトレーニングの負荷方法を紹介する。3回目は「自分の身体を変える」というテーマで、体脂肪の燃焼や筋肉肥大に関する生理的な機序について触れ、実習ではエアロビックトレーニングやウエイトトレーニングを実践する。講師は藤瀬武彦助教授である。

映画を観る楽しみ

情報システム学科助教授　樋口　光明

「映画を芸術にする唯一の方法は、スクリーンを全部文字にすることである」とバーナードショウが言ったにもかかわらず、映画は間もなく文化の最盛期を迎えた。そんな頃にできた数々の名作が人々の心を打たないはずはない。

今回の市民講座で上映される作品の中にも、最盛期につくられた2本がある。『十二人の怒れる男』は、今でも会社の新人教育などに使われるほどのディスカッションドラマの古典だが、アメリカ市民社会が、言論に対して強い信頼をよせているのが感動的である。

一方の『少年』は、一見ペシミスティックな市民社会を描いているようであるが、処女作「愛と希望の街」の"鳩をうる少年（原題）"以来、一貫して大島渚が少年に託そうとしたものは、「輝ける未来」なのである。

後の2本も見逃せない。『戦艦ポチョムキン』は、最初に映画を芸術の域に高めたことで余りにも有名な作品だが、革命がどのように市民社会にかかわったかを知る上でも、映画が70年以上前に既に完成の域に達していたことを知る上でも興味深い。

もう一つの『クライング・ゲーム』は、4本の中では飛び抜けて新しい作品なので、「今」を強く感じる。イギリスが抱える厳しい現実の中に置かれた特殊な市民社会の人々が、普遍的な愛の物語を見る人に語りかけてくるところが素晴しい。

「ウーマン・カレッジ」本学を会場にスタート

「ウーマン・カレッジ」は女性の社会参加を支援する事業の一環として、県教育委員会が県内大学と協力して開催してきた連続講座である。主として社会人の女性を対象としているが、男性でも学生でも参加できる。本学で一九九七年度から開催されている「ウーマン・カレッジ in 西蒲・燕」は三十回の講義を三年計画で行うもので、新潟市西部から燕市にかけての地域と大学の密着な連携をはかることも目的としている。

三年間の共通テーマとして「今、変わるとき・変えるとき」と掲げ、既存の男女のパートナーシップを女性学の視点から見つめなおすための講義を組んでいる。昨年までの二十回の講義では、女性学の理論的基礎から現代社会における女性に関する多様な問題まで、多くの論点を取り扱った。最終年度にあたる今年は「わたしたちのエンパワーメントをめざして」という副題のもと、各種ワークショップやシンポジウムも予定されており、より実践的に男女が共同して開かれた社会をつくることを学ぶ内容になっている。5月22日㈯から11月13日㈯の間に10回、本学で土曜日に開かれる。

立て、万国の女子学生

情報文化学科助教授　越智　敏夫

あるテレビ局が新潟県議選の立候補予定者に対して行ったアンケートの結果を見る機会があった。メディアでの公表を前提に答えているものである。それらのなかで特に印象に残っているのは「女性は家の中にいるべきなので県議選に立候補すべきでない」という男性現職議員の回答である。一匹見つけたら三〇匹は隠れてると思えというのはある昆虫の場合だが、こんなおやじも流しの下あたりにたくさん隠れてそうだ。思想信条の自由はあるから誰が何を考えようと勝手だ。しかし問題なのは、こんな人間が県民の代表となって兆円を超える県予算を決定し、条例を制定しているということだ。

女性差別は良くないと誰もが言う。しかし女性を差別する男性がいる以上、女性差別はなくならない。その意味であらゆる女性問題は結局のところ男性問題なのだ。男の頭の中を変えなければ何も解決できない。場合によっては法的規制も必要だろう。ところがこの男性議員のような人間が県の条例を作っている。だから中央では男女雇用機会均等法という最低の法律まで作られてしまう。あの法律が男女の雇用機会を均等にしていると思う奴がいたら阿呆である。たとえば就職活動中の女子学生にとって、あの法律は極度の徒労感を与えてくれるだけだろう。じゃあ、どうするべきなんだろうなあと考え込んでしまうが、とりあえずはこんな議員を落選させることから始めても良いかと思う。どうですか、選挙権を持った女子学生の皆さん。ほら、「国を変えるには地方から」と彼らも言ってるじゃないですか。

就職活動について

就職指導委員長
●
永井　武

平成10年3月卒の本学第1期生の就職率は98%、平成11年3月卒の第2期生の就職率は84%であった。平成12年3月以降の卒業生は100%の就職率をめざして、学生諸君、教職員共努力していきたいと思う。学生諸君に努力してもらうことは、就職ガイダンス、就職の手引き、就職情報システムなどで、すでに伝えてある。

今年は4月23日から2階の就職コーナーに就職相談室を開設した。相談員は、就職指導委員会の小沢、池田、佐藤、永井、片山、榊の各委員である。1階就職課カウンターに予約票があるので、予約の上、授業が空いている時間に気軽に相談しに来ていただきたい。相談内容は、先輩の就職先、推薦で採用してくれる会社、履歴書の書き方など何でもよい。多くの学生が相談に来るのを待っている。

昨年から提供している就職情報システムを活用するのも、就職活動のために有効である。4月27日現在、本学に283社から求人票が来ており、これらはすべて就職情報システムのベータベースに入力されており、学内のすべてのパソコンから、Netscapeで、業界別、本社所在地別などの検索が可能である。Netscapeを演習した学生諸君には、操作は簡単である。

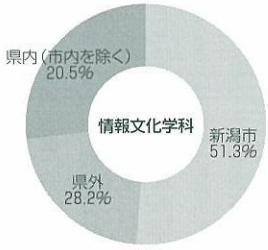
大学院進学

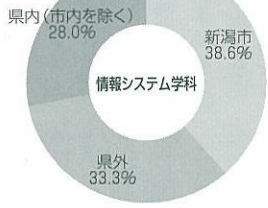
平成10年3月情報文化学科卒業生の柴田謙一君が、新潟大学人文学部大学院修士課程の入試に合格しました。

平成11年3月 卒業生就職先一覧

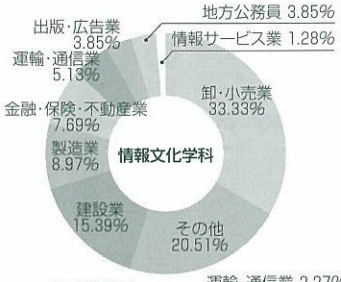
㈱BSNアイネット
㈱MSI
㈱NSコンピュータサービス
㈱PA
㈱アイエックス
㈱アイビー企画
㈱アプリコット
㈱ウオロク
㈱コメリ
㈱サンテック
㈱シナゼン
㈱ジムコンピュータサービス
㈱ジャストミートコーポレーション
㈱タカヨシ
㈱ツバメックス
㈱データ通信システム
㈱ナカムラ
㈱ナルス
㈱二チロ
㈱ハヤマ
㈱ブレスメディア
㈱ベンチャーセーフネット
㈱マイカル新潟
㈱リンコーコーポレーション
㈱ワイエムフーズ
㈱ワイズインターナショナル
㈱荏原製作所
㈱熊谷組
㈱兼古製作所
㈱原信
㈱古島
㈱芝通
㈱小千谷コンピュータサービス
㈱新潟県農協電算センター
㈱新潟日立
㈱清野屋
㈱扇や商店
㈱全農情報サービス
㈱第一印刷所
㈱大庄
㈱中央塩ビ製作所
㈱長岡ケーブルテレビ
㈱東芝オーエーコンサルタント
㈱東日本ハウス
㈱藤田製作所
㈱日本情報システム
㈱日立製作所中条
㈱富士通新潟システムズ
㈱武富士
㈱福田組
㈱文久堂
㈱北都
㈱名古屋三越
㈱みやけ食品
㈱安田ヨーグルト
CEC新潟情報サービス
JAいちい
KCC
アークランドサカモト㈱
アイフル
アサンテ
アプリコット
アムス㈱
イエスト
インネット㈱
オークス
カネツ商事
カネ美食品㈱
㈱キューピット
グリーン産業㈱
コニカNC
コングシステム㈱
コンピュートロン㈱
システムリサーチ㈱
ジャスコ
㈱ジャパンネット
スミサン㈱
スリーエスシステム
セコム上信越㈱
セントラル商事
㈱ソネット
ソリマチ技研
ダイダン㈱
ダイナム
タガユ物産㈱
ディックファイナンス㈱
トナミ運輸㈱
トヨタカローラ新潟㈱
ドラックトップス
㈱ニッシン
ニューズライン
ネッツトヨタ新潟㈱
ピコイ
ひらせいホームセンター
フジイコーポレーション㈱
フジレメック
フジ印刷
プロミス㈱
ボスシステム㈱
ミロク情報サービス
メガネスーパー
安田生命保険相互会社
ライオン堂
㈱ワーナーマイカル
越後交通㈱
岡野電気工事㈱
角上魚類㈱
刈羽村農協
巻信用組合
巻町役場
丸運建設㈱
共栄電工㈱
共和工業
原田乳業
源川医科器械㈱
公認会計士・伊藤満邦事務所
昱工業㈱
済生会新潟第二病院
三井物産情報通信㈱
山津水産㈱
自衛隊
鹿島建物総合管理㈱
十日町農業協同組合
小野塚印刷㈱
信江物産㈱
新井リゾート開発
新潟スバル自動車㈱
新潟ゼロックス㈱
新潟トヨペット㈱
新潟医療生活協同組合木戸病院
新潟運輸㈱
新潟県信用組合
新潟県共済農業協同組合連合会
新潟県警
新潟県酒類販売㈱
新潟市役所
新潟酒販㈱
新潟綜合警備保障㈱
新潟中央銀行
新潟日産自動車㈱
新潟日本電気ソフトウエア㈱
新菱冷熱工業㈱
真電
清水フードセンター
清水建設㈱
西田鉄工㈱
積水ハウス㈱
雪国化学㈱
相村建設㈱
大映総合教育システム
大成サービス㈱新潟支社
中越クリーンサービス㈱
中越運送㈱
中越通運
中央出版㈱
中之島町役場
田代
東テク㈱
東光商事㈱
東芝アドバンストシステム㈱
東洋熱工業㈱
藤木鉄工㈱
藤和興産㈱
日産サニー新潟販売㈱
日豊電資㈱
日本シイエムケイ㈱
日本フード㈱
日本マクドナルド㈱
日本生命
日本赤外線㈱
日本電気通信システム
白根市役所
富士ソフトABC㈱
分水町役場
北海製罐㈱
味の素システムテクノ
和同情報サービス㈱
萬代電業㈱
アークベル
㈱北越書館
日生不動産㈱
SIG㈱
㈱TECエンジニアリング
原田乳業㈱
㈱かあてんや
テクノバンク㈱
吉田金属工業㈱
㈱アイ・シー・オー
南部郷病院
石本金属㈱
大竹オール㈱
神林村役場
富士火災海上保険㈱

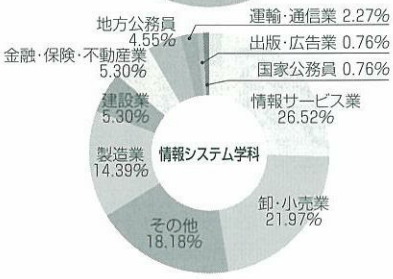
■就職先（本社所在地）





■職業別就職状況





韓国での語学研修

『力』の人々

情報文化学科3年
荒木　玲子

今度の春休みを利用して、韓国のソウル市内にある韓国外国語大学に約2ヶ月間、語学研修にいって来ました。費用もかなりかかるこの短期留学を決心させたのは、どうしても聞き取り、会話の実力を付けたいと考えたからです。このまま日本で韓国語を学び続けても、このふたつだけは身に付かないように感じたのです。

韓国に行くのは初めてではありませんが、いつも『力』に圧倒されながら初めて触れることも多く、大変な毎日でした。『力』は、韓国の特徴です。地下鉄に乗れば我先に座ろうとする人の波、市場に行けば無理にでも店に誘い込もうとする店員、人々のすさまじい声、食堂に入れば食べきれないほどの大盛りの料理。すべての人が自信溢れているように感じられます。この『力』は、人々のつながりの深さから生み出されるのだと考えました。家族の写真を持ち歩き、誇らしげに見せたり、同性同士で手をつなぎ、肩を抱いて街を歩いたり、自分の友達をすべて紹介しないと気が済まなかったり、時にはうっとうしいほどの友情を表現したりします。日本にはない人のつながりに驚いたり、うんざりしたり、感動したりしました。

このようにハードな毎日を過ごして帰りたくなった時もたびたびあったのですが、韓国人の友達ができたことは韓国に来て最もうれしかったことのひとつです。彼女が私を韓国人に間違えて、サークルの勧誘をしてきたのがきっかけで仲良くなりました。韓国語でしか話ができませんから、初めの頃は私の語学力不足で自分の紹介と彼女の紹介を聞くのがやっとでした。しかし、1ヶ月ほどたった授業中、ふっと急に韓国語が聞き取れるようになったのです。話には聞いていましたが、私も同じ体験ができるとは信じられませんでした。それからの彼女との会話は楽しくて仕方ありませんでした。すごく簡単な単語だけでしたが、何時間でも話すことができるようになりました。友達のこと、彼氏の話、将来のこと、学校のくだらない噂話、お互いの国のこと。

一人きりで行った韓国は大変なことが沢山ありましたが、「韓国人の友達をもっと作りたい」、「もっと話したい」という欲がでたことは、私にとって最も良かったことです。

▲韓国外国語大学教室にて（前列中央が著者）

“ESS（英語会）が北信越英語会連盟に加盟”

本学ESSが北信越英語会連盟（HESSA）に加盟した。加盟大学は本学の他に、新潟大学、信州大学、福井大学、富山大学、金沢大学、金沢学院大学であり、「フレッシュマン英語ディスカッション」「スピーチコンテスト」「英語ドラマコンテスト」などの行事を通して交流を深めていく。本学の役員は情報文化学科4年佐々木伸浩君である。

教員の活動

新潟国際情報大学「紀要」第2号発行

3月に本学教員の研究活動の成果を集成した紀要第2号が発行された。人文科学1編、社会科学9編、自然科学2編、情報システム1編の合計13編の論文が収録されている。情報閲覧室で閲覧できる。

塚田真一講師 日本計算機統計学会奨励賞を受賞

情報システム学科塚田真一講師は、5月20日、日本計算機統計学会総会において、同学会奨励賞を受賞した。

この賞は、学会誌等に発表した論文が優秀と認められる若手に与えられる賞であり、「分散共分散行列の固有ベクトルの検定に関する3つの統計量の漸近帰無分布と検出力の比較」などの論文が評価されたものである。

蔡建国教授「五四運動と20世紀中国」国際シンポジウムで研究発表

ことしは、中国近代・現代史上画期的な思想開放運動であった五四運動80周年の記念年である。80年前の1919年5月4日、21ヵ条約に反対して北京大学から全国に広がった大規模な反帝愛国思想開放運動は、80年後の今日も中国では、「愛国、進歩、民主、科学」という伝統として続いている。この中国の歴史において意義深い運動を記念して、5月1日から3日間北京大学で「五四運動と20世紀中国」国際シンポジウムが開かれ、世界各地から百名の学者が参加し討論した。蔡建国教授は「五四」時期の北京大学長蔡元培の思想と五四運動の密接な関係をテーマに研究発表した。

宗沢教授ヘルシンキでICIS学会出席

情報システム学科宗沢教授は、昨年暮にヘルシンキで開かれたICIS'98に出席しました。

ICISとは国際情報システム学会の略で、毎年暮に米欧の各都市で交代に開かれています。昨年は、はるか北欧の首都ヘルシンキで開かれました。この国は、シベリウスの序曲フィランディアで有名で、美しい森と湖に囲まれたスオミの国と呼ばれ、北のラップランドというところはサンタクロースの発祥の地です。何故このような都市に世界のトップレベルの情報システムの研究者が集まったかというと、今ウインドウズと対抗して、世界中で伸びているLinuxの発明者が、ヘルシンキの出身だからだと言うことです。

教員の出版物

石川真澄著「硬派エッセイをささえるもの」――日本エッセイストクラブ編『エッセイの書き方』（岩波書店、1999年2月）所収

日本エッセイストクラブ会員13人の文章を集めた本。そのなかで、政治についてなどの「硬派」といわれる文章を支える要素は事実、論理、情動、そして分かり易さであることを指摘した。

伊藤利朗、坂和麿、市川照久、片岡信弘編著「ネットワーク・コンピューティングで会社を集合天才に変える本」（オーム社、1999年1月）

国際大競争時代に突入し、各企業は創業以来の低採算に苦しんでいる。その原因は、業界横並び主義のつけともいえる創造性の欠如と、情報ネットワーク活用の遅れによる知的生産性の低さである。本書は、この苦境を克服する方策の一つとして情報ネットワークを徹底的に活用し、単に生産性のみならず、創造性を向上する方法を提案するものである。

市川照久著「職業人として企業から見た課題」――情報処理学会情報処理教育委員会編『二十一世紀　豊かな情報化社会の実現を願って教育の視点から』（情報処理学会、1999年3月）所収

本書は、「産業構造の転換と情報処理教育」シンポジウムにおいて、産、官、学それぞれの立場から論じられた議論を、情報産業の育成や雇用の創出などの産業を育むための教育という視点に加え、情報化社会を生きるための教育にも重点を置いて再構成したもので、15名の共同執筆である。

ロシア研修訪問記

ロシア研修旅行の思い出

情報文化学科3年
●
神林　司

▲ウラジオストック鷹巣展望台にて

今回の研修旅行を振り返って、「百聞は一見にしかず」という言葉の持つ意味を改めて思い知りました。日本人の抱くロシアのイメージは極寒の地、モノクロームの街並など、どこかダークなもので、近付き難いというのが一般的だと思います。またこの国に関する情報量があまり多くない為、近くても遠い国のように思えます。しかし実際には、街には活気があり、そこに暮らす人々も明るく親切でした。今回の研修旅行では、実に様々な発見があり、とても刺激を受けました。特に印象深いのは、ウラジオストクでの極東大学の学生達との交流会です。ロシアの学生達が今、何を考え、どのような事に興味を持ち、またどんな将来のビジョンを持っているのかを知り、彼らが確固たる目標を持って勉強しているのにショックを受けました。それ以上に、自分の語学力の無さにショックをうけました。交流会に参加した日本語学科の学生達は日本語が上手で、聞けば1日に5時間は勉強していると言うので、私ももっと頑張らなくてはいけないと思いました。これだけでも研修旅行に参加した価値はあると思います。大学の研修旅行では、学生達との交流会や現地企業の見学、ロシア人家庭への訪問など、普通の観光旅行ではできない体験ができ、本当に行って良かったと思います。期間中は天候にも恵まれ、美しい街並みや風景も印象深かったです。ハバロフスクでは凍ったアムール河の上を歩くという貴重な体験もしました。ロシアへはまた行きたいと思います。

海外で異文化に直に触れることは、実に様々な発見、おどろきに満ちていて、時には人の価値観や人生観すら変えてしまうことだって有り得ると思います。特に若い時の体験は人生に大きなウエイトを占めると思うので、機会を逃さず積極的に参加すべきだと思います。

アメリカ研修訪問記

アメリカ研修旅行を振り返って

情報システム学科4年
●
渡部　浩嘉

1999年2月27日。私達16名はアメリカ研修旅行に出発しました。そのほとんどが、初飛行機、初海外旅行という人ばかりで、不安と希望に胸を膨らませていました。飛行機が飛び立つとき、その騒音や、シートに押し付けられる圧迫感に驚かされながらも、無事に最初の目的地、カリフォルニアにまでたどりつくことができました。

カリフォルニアは、3月だというのにとても暑く、日差しも強いので、みんなの顔が自然としかめツラになっているようでした。空港から、次の目的地へと向かうバスの中から景色を眺めた時、その壮大な景色に圧倒されました。

初日の予定は、この研修旅行の中でメインイベントともいえる、ホームステイ体験でした。学生14名がいくつかの家庭に分けられて、それぞれの家族の中で貴重な体験をすることができました。私は、海や山、公園、映画館や水族館、ゴルフ場にも行きました。そこで会うアメリカの人々は、みんな私に対して親切で気さくに接してきました。それにつられるようにして、私はだれとでも構わずに楽しく過ごすことができました。英語がへたくそなのに気持ちが通じているように思えるのが不思議でした。

3月7日までの9日間をアメリカで過ごし、日本に帰ってきてから感じたのは、日本の狭さでした。土地が少ないので上へ上へと建物を高くして狭い土地にひしめき合っている日本の都会にくらべて、アメリカはあまりにもスケールが大きく感じました。

ただ、高層ビルや巨大な建物がたくさんあるだけでなく、人々がリラックスして過ごせるような、余暇を過ごすための施設が充実していました。アメリカの人々に感じる余裕は、こうした環境の中から生み出されているのでしょうか。

▲SPACE SYSTEMS/LORAL社工場見学、人工衛星の前で

湧源 YUUGEN

編集後記に代えて

広報委員長　竹並　輝之

卒業式、入学式が終わり、卒業生は実社会の、また新入生は大学の新しい環境での活動が始まった。新しい環境での生活には、何かとストレスが伴うものである。一人暮らしなどの生活環境の変化、初めて会った仲間との対人関係、高校との勉学方法の違いなどのストレスが原因で、やる気を喪失してしまう、いわゆる五月病が心配になる季節になってきた。

一方、この時期は、暑くなく、寒くなく、スポーツなど戸外の活動には最も良い気候である。ストレス解消には、スポーツに取り組むことを勧めたい。

スポーツの面白さは、今までできなかったことが、練習によりできるようになる達成感を、身体で感じることができることである。どうすればもっとスピードをつけることができるか、もっとコントロールをよくすることができるか、今まで勝ったことのない相手を倒すことができるか。いろいろ考え、工夫し、試行錯誤を繰り返し、練習に励む。そうしているうちに、ある日突然、前日までできなかったことができるようになる。私も経験したことがあるが、このときの喜びは格別である。こうした達成感は、スポーツに限ったことではない。今号の記事「韓国での語学研修」の中で、荒木さんは語学においても同様の経験をしたと書いている。

スポーツに限らずとも、大学生活の間に取り組む目標を定め、その達成に向けて一生懸命取り組んでほしい。目標をもち、自分のやりたいことに熱中している人には五月病は無縁であろう。